

再起の家

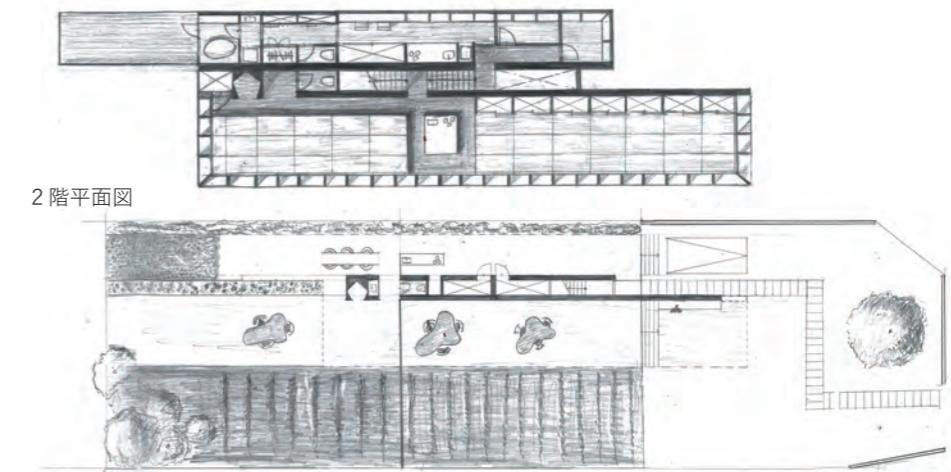
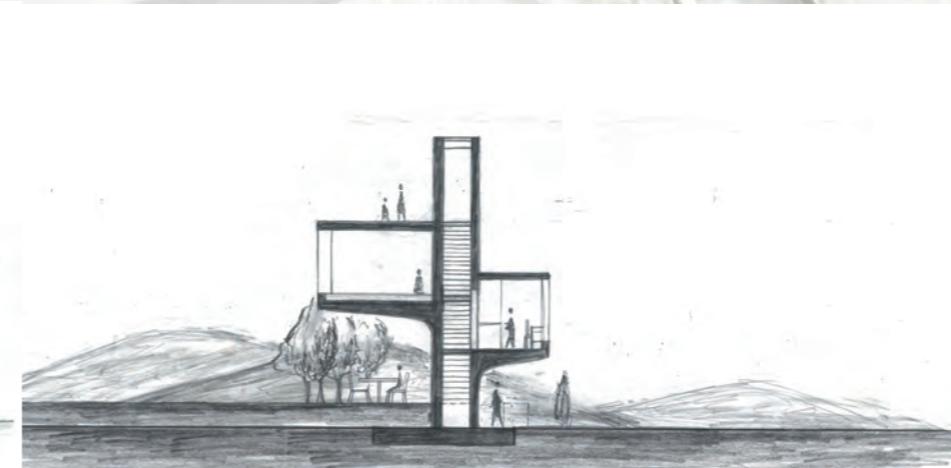
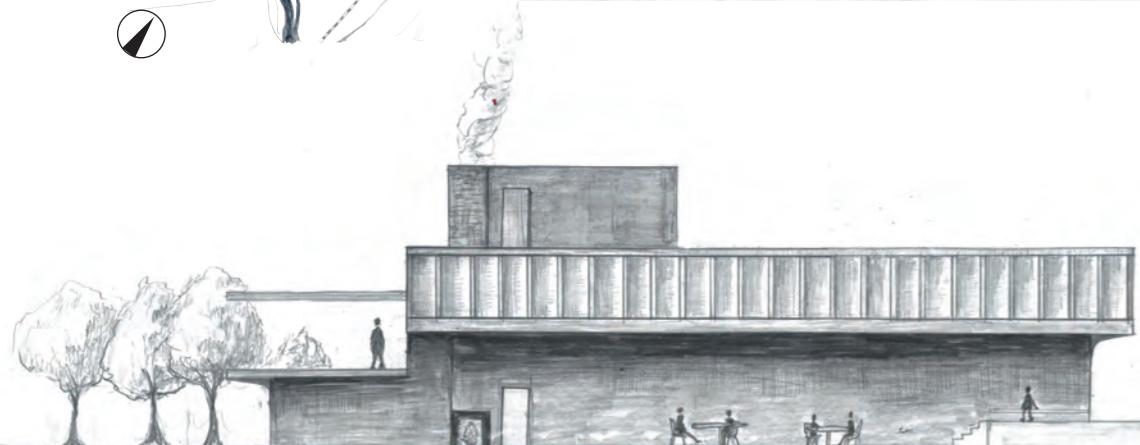
—広島平和記念公園の経験の集積—

平和記念公園は、中洲の広大な敷地に対し、平和記念資料館（陳列館）が敷地南西側に丁寧に小さく並べられている様が獨特な雰囲気を作り出している。この建物と公園の関係は資料館へ訪れる初めて理解することができた。

資料館で凄惨な事実を目の当たりにすると、そのどんよりとした気持ちは資料館外に出てもなかなか消えられないことはないが、目に入る広大な緑と慰靈碑によって過去から現実へ徐々に引き戻され、いつの間にか現代の広島にたどり着いた。厳しい現実を伝える資料館とそれを取り囲む広大な公園、この2つの関係によってこの体験は完成したと私たちは考える。つまり、この建物と余白の関係こそが我々の感情の変化を寛大に受け止めたのだ。

計画敷地

敷地は去年、水害にさいなまれた真備地区の中。
私たちは深く傷を負ったこの地域を選定すること、それと丹下氏の思想を重ねることによって、住民の精神に寄り添う再起の住宅を目指す。



南側立面図

断面図 A-A'

2階平面図
配置図兼1階平面図

災害の痕跡と余白

崩れかけたコンクリートブロック塀と水害を生き延びた竹林以外、敷地には建築の痕跡は見当たらない。この空白の場所に、そのまま建築を建てるのではなく、建築とオープンスペース（余白）の関係を、広島平和記念公園に倣い、慰靈の場所として構想した。平和公園が余白としての空間に人々を寛容に受け入れるように、この場所が地域のすべての人を開かれ、それを支える建築が心のよりどころとなることを願った。

軸線と二つの領域

東西方向に視線が導かれるような軸線を北側に設定した。この軸線によって、以前住宅が建っていたであろう領域と北側焼家に沿った細長い領域に分けられる。平和資料館における、凄惨な事実を伝える展示部分と余白の広場空間に向かう展望ロビーの背中合わせの関係に、支える空間（水回り+個室）と支えられる空間（広間）に置き換えた。二つの領域を分ける軸線上には、玄関から屋上まで一直線に上がる階段がある。二つの踊り場からは、北と南の棟のルーフデッキに出ることができ、災害時には、玄関を開放することで、緊急の避難場所となる。



モジュール

平和資料館は、建築と社会との関係を結びつけるモジュールで構成されている。フィボナッチ数列によって導かれる寸法によって、大きく人間の尺度と社会的人間の尺度とに分けられる。この寸法体系によって、北側の領域の高さ焼家のスケールに合わせた2482を、南側の領域は、西側の風景に大きく広がり、地域の人を受け入れる社会的尺度4016で構成した。

平和のともしだと慰靈

平和記念公園の「平和の火」のモニュメント。東西に大きく両手を広げ、大空に向かい、北側の原爆ドームを望む過去の遺産に向かう領域と、平和資料館を背景に入人々が集まる広場の領域がレベル差をもってこのモニュメントの伸ばされた腕の下で融合し、慰靈のともしだが天に向かう。この両手を広げた構造体の形を断面の基本モチーフとした。両手の下におおらかに覆われた余白の空間と、慰靈と人々の心のよりどころである「ともしだ」としての暖炉の存在、ここでは地域の人々の交流と災害時の協力と、生きる力を呼び起こすのである。